

コメント

アカデミズムにおける「モグラたたき」と「ゲッター化」(校正原稿版)

広瀬 裕子 (専修大学)

1 新しい社会運動としてのクィア・スタディーズ

広瀬です。よろしくお願いたします。持ち時間は大体 20 分ということです。

指定討論者としてのコメントを考えながらクィア・マリィさんのお話を聞いていました。マリィさんがまとめてくださったクィア・スタディーズの内容や位置づけについては、全くその通りだと思いますので、その辺にからむのはやめて、少し角度を変えて、あるいは立場を変えてといえますか、補足のような形でコメントをしたいと思います。先ほどのマリィさんの言葉を使いますと、この会場での切り抜けネゴシエーションも意識しなければならぬことも話すことになるかもしれませんが、やばいなということも想定しながら、言葉を選びながら、でも挑発的にやってみようと思います。また、今日おいでの方々は教育学以外の領域の方々も多いようですし、さまざまな活動に関わっておられる方々も見受けますので、その辺も念頭におきながら話したいと思います。

私がお話を聞きながら考えたのは、クィア・スタディーズというものの、今現在だけではなくて、今後の位置づけがどのようになるのだろうかということです。これは、いわゆる新しいタイプの社会運動の一つとして、クィア・スタディーズも例外なく直面する課題でもあると思うのです。マリィさんの話の中に、クィア・スタディーズは始まったばかりだという人もいれば、いやもう終わったのだという人もいるというのがありました。その辺りにかかわることかもしれません。

2 「緊急性の喚起」とその後の課題

クィア・スタディーズも新しい社会運動の一つですが、新しい社会運動というのは、それまでの社会運動が、もちろん社会運動に関わっていない「一般」の人たちも含めてですが、気がつかなかったことを問題提起するものです。それまでその問題が認識も発見もされなかったということは、それを表す概念もタームもないということですから、問題の趣旨を伝えるためには、言葉を絞り出さなければなりませんし、またすぐに言葉が絞り出せ

るわけでもありません。たどたどしい言葉を使いながら、言葉で伝えられない部分は行動で表現したり、それでも表現しきれず、暴れてみたり、そうやって問題の存在を人々に示して認知させることをしなければならないわけです。「クィア」という用語も、その過程で絞り出された言葉の一つでしょう。

耳慣れない言葉でのアピールや実力行使のようなパフォーマンスが何を意味するのかはすぐには理解されないでしょうから、この問題提起は、社会のメインストリームにとっては理不尽さを伴います。この理不尽さは、「新しい社会運動」の宿命であり、また、逆にアイデンティティの核でもあるといえるとも思います。もしもすぐに理解されるのであれば、もちろん理解されることは悪いことではありませんが、もしもすぐに分かるのであれば、その問題は大量に新しいジャンルの社会運動として構想しなくても解決する「程度」の問題だったということです。

私は、新しい社会運動がこうした理不尽さを不可欠に持ちながら問題提起をする段階のことを「緊急性の喚起」というふうに呼んでいます。まずは問題を認知させなければならないと思い、そのためには手段を選ばずに必死に声をあげる、そういう段階のことです。「緊急性の喚起」のあとには程度の差はあれ、必ず否定的敵対的リアクションが生まれます。けれど、そういう社会の敵対的リアクションは、逆説的ですが、問題の存在を認知させるという「緊急性の喚起」の目的が達成されたことの証でもあります。いくつもの「新しい社会運動」は「緊急性の喚起」を経て形を成してきたのだと思います。

問題はその後なのです。「緊急性の喚起」がある程度なされた後、その後の運動をどのように進めるかというところが、「新しい社会運動」にとって大事なところなのだろうと思うのです。いつまでも「緊急性」を叫び続けて社会の「たん瘤」でいるわけにもいかないわけで、社会のメインストリームに咬んで、問題の発生源そのものでもあるメインストリームの組みかえをしなければなりません。その辺りの読みと展望が大きな問題だと思っています。

先駆的な「新しい社会運動」としてリブがありました。1960年代から1970年代にかけてなされた「緊急性の喚起」は、良識的メディアといわれている硬派の新聞やテレビ報道もリブに好意的ではありませんでしたから、波風立てながらのプロセスでした。とはいえ一旦「緊急性の喚起」がされると、心ある社会の部分は、聴く耳を持ってその問題を理解するためのスタンバイ態勢にはいります。問題を理解しようとする人たちは必ずいますから。そのスタンバイにどのように応えるかというのが、その後を左右することにもなると思うわけです。この段階ではゆっくりと、言葉を構成しながら紡いでゆくということをしなければなりません。人に説明する前に、自分自身が問題の素性をまずは理解するための作業でもあります。

問題を整理して、自分で理解して、人に伝えて、そして解決のための具体的な対応を考える。こうやって解決していけばよいのですが、問題解決は一気に進むものでもありませんし、解決した問題の先に別の種類の問題が見えることもあります。当初提起した問題へ

の対処半ばで新しい問題が見えてきてしまうのも常ですし、そして新しく見えた問題の対処のしかたが最初の問題とは方向を異にする場合もあります。同じ社会運動としてはじまっても、対処しなければならぬ問題が多様で多彩になり、重層化し、異質な問題を同時進行で考えていかなければならなくなる、位相の異なる問題が混在する段階がやってくるのです。クィア・スタディーズは終わったという人もいればこれからだという人もいるというのは、この辺りにかかわっているのだと思います。クィアの領域においても格闘しようとしている問題が重層化し、多彩になり、一つの論理では把握ができなくなっていることの証左だと思われます。

3 アカデミズムにおける「モグラ叩き」

今日のテーマは大学におけるクィア・スタディーズですが、大学において新しい社会運動というのがどういう場所にあるか、あるいはなければいけないのかということに絞って考えていきたいと思います。それには二つのレベルの対処について見る必要があると思います。一つは大学を構成員のコミュニティとして考えて、そこに生身で生きている人たちが持っている問題をどうしようかと考えるレベル、もう一つは、大学というのは言語や概念でアカデミズムを紡ぐ場であるわけで、そのアカデミズムの中身に対し、どういうふうに関与して仕事をするかというレベルです。

コミュニティとしての大学というレベルについては、生身で生きている人は大学以外にもいますから、この水準の問題は、必ずしも大学に特定の問題として立てなければならないということではないかもしれません。多少大学特有に考慮しなければならない人間関係の要素はありますが、ほかの場所や組織と共通するところも多いはずですし、対処における課題や展望も他と共通する部分も少なくありません。ですので、「大学における」といったときに不可欠に考えなければいけないのは、アカデミズムの部分にどういうふうコミットするか、こっちの方になると思われます。ということで、今日はこの部分に焦点を当てたいと思います。

アカデミズムにおいても、新しい問題の提起は緊急性の喚起と類似の経緯を持ちます。それまでの学問体系が、あるいは研究手法や観点が認知していなかった問題を言葉を絞りながら指摘する、と同時にその問題を把握するツールも旧来のアカデミズムに不在であることを指摘する、そういう問題提起からはじまります。アカデミズムの人たちはある程度頭では理解しますから、なるほどそういう問題があったのだ、ということぐらいは、それほど困難なく理解するでしょう。にもかかわらず問題を看過したような発言や視点の欠除は引き続き見られるものですから、その都度、指摘と批判を繰り返すことになるわけです。そういう繰り返しの状況を表すいい用語はないものかと思っていたのですが、先日、社会運動について小熊英二さんが書いているものを読んでいたら、小熊さんが「モグラ叩き」

という言葉を使っていました。小熊さんは必ずしも今日の私の話の文脈で使っていたわけではないのですが、ちょっとこの言葉をお借りすることにして、つまり、緊急性の喚起のあとは、そうした引き続き見られる「失言」に対してしばらくモグラ叩きをすることになります。問題発言を見つけては、ポンと叩く、またあちらで問題発言があり、すぐさまポンと叩く、もちろんそうやって叩かれないとわからない人もいますから、モグラ叩きも必要ではあるのですが、ともすると叩くことが目的になったり、叩いているだけで安心したりしがちであることもないとはいえないのです。

実のところ社会運動の領域では、このモグラ叩きを何十年にもわたってやっていたのではないかとも思うのです。

4 アカデミズムにおける「ゲッター化」

しかしモグラ叩きに終始してよいわけでもありません。少し積極的に展開すると、問題提起した内容を、新しいテーマ、領域として、メインストリームに付加するという対応が始まります。こうした試みはかなり蓄積がなされてきています。

例えばフェミニズムという問題提起を受けた教育学についてみてみますと、問題の言説化は教育における性差別の問題、男女共学の問題、ジェンダーの問題、というように焦点は変遷しながらも独立した問題領域として作られて、十分に市民権を得たジャンルとして確立しています。もちろん、ジャンル生成の過程も、モグラ叩きをしながらの作業でもあったと思います。

しかしこの新しいジャンルというものがくせ者なのです。「では、足りない部分はそのジャンルであなたがやってください」ということで済まされてしまったりもしないわけでもない。新しくできた「たん瘤」領域を特定の人が「分担」することで手打ちになったりすることがないわけでもないということです。それまでメインストリームだった枠組みの方はというと、この新問題に関しては屋外に付加した領域で「解決」したことにされて、母屋はそのまま安泰ということになってしまうということになりかねないのです。もちろんそれでは齟齬が残りますが、その齟齬は「モグラ叩き」が引き続き担当する、そういうことになります。

私は、このように「あなたがやっておいてくださいよ」というふうに処理して済ませることを、ゲッター化と呼んでいます。新しい領域を一つ立てて、それはないよりはましではありますが、その中でその問題を、それを担当する誰かに任せておけばそれでいい、というふうになって、新しい問題がメインストリームの枠組みから隔離されてしまう形です。設置された新領域が不満のガス抜き場にもなって、メインストリームの枠組みはなお安泰というふうになってしまうのです。もちろん「ゲッター領域担当者」以外の人も、新しい問題については敵対的でなく、全く無視するというわけではないのですが、時々そ

の問題に言及することはあっても、リップサービスに終わることもないわけではない、そんな気がします。

5 メインストリームに「咬む」ということ

しなければならないのは、メインストリームに咬むということです。状況は重層的ですから、臨機応変にモグラ叩きもしなければならないときもありますし、ゲッターをつくらなければならない局面もありますが、メインストリームに咬むということをしないといけない。とは言っても、これは容易いことではありません。メインストリーム(に所属する人たち)にその作業ができるかといったら、能力がないとは思いませんが、パトスはないでしょうから、誰がその作業をやるかという、問題提起をした方がやらなければならない。ただ、繰り返しますが、これは物すごく難しく大変なのです。

私は教育学の中の教育行政学を中心に勉強しています。一方で教育行政学をやり、また一方でフェミニズム、セクシュアリティについてやるというような、二足のわらじスタイルで、両者がうまくクロスしないまま苦勞する時期が長く続きました。私の場合、フェミニズムの問題提起をキープしながらメインストリーム、この場合は教育行政学ということになりますが、メインストリームに咬むということを課題にして二十年以上も過ぎたということになります。モグラ叩きはできても、たん瘤は作れても、メインストリームに咬むのはなかなか難しいのです。そもそもどうすれば咬んだことになるのか自体も手探りです。最近、ようやく両者を噛み合わせる可能性に関して一つの方向が見え始めた気がしています。

例えば教育行政学の中のメインストリーム、メインストリームといってもいろいろな押さえ方があるとは思いますが、割とおなじみのものとして、国家権力は価値領域にタッチするべきでないという原則を中心的モチーフとしているものと押さえてよいでしょう。日本の教育行政学はこのテーゼをかなり大事にしながら理論構成をしてきていました。そして、一方、フェミニズムがジェンダーやセクシュアリティを問題提起してきた文脈に目を向けてみますと、例えばかつて、リブが「個人的なことは政治的なことだ」というスローガンを掲げて問題を顕在化させたことは象徴的ですが、公私二元論に関して強烈な批判意識を内在させています。個人的なことは政治的なことというのは、つまり私的領域を非政治的、非公的なものとして見る見方そのものが、性差別が両領域にまたがって構成されているということを見えにくくするイデオロギッシュなものであるという批判的メッセージです。

一方で国家権力は価値領域に口を出すなという原則を立てて、一方で、公的領域と私的領域が相互関与構造になっていることを無視するなというメッセージを掲げる、この相反する並行した論理を、いったいどのように統合するか。教育行政学とフェミニズムを接合

させるというのは、そういう射程の問題でもあるのです。フェミニズムのメッセージを教育行政学に組み込む方法を、たとえば性差別があることを告発するアイデアとして発想する方法もあります。けれど、それだけではメインに咬むというよりは付加領域、たん瘤的位置を越えないことになってしまうのだらうと危惧するのです。

相矛盾する原理の、何が再考されなければならない部分なのかということが問題になるわけですが、私は、公権力は価値領域に口を出すな原則が見直されなければならないのではないかと思うようになってきました。確かに公権力は価値領域に介入するなという公権力不介入原則は、今でも個別の政策を批判する時などに「活躍」していることは、否定はしません。けれど、原理原則としてこれがどれくらい使えるかという、もう揺らいでいるのではないかと思っています。例外としなければならないものが多すぎるのです。現実を見ても、公私を区分けしては太刀打ちできない問題があちらこちらに見られるようになっています。家庭内暴力、セクシュアル・ハラスメント、児童虐待などは、そうして太刀打ちできないきわめて分かりやすい例です。どれも私的領域と考えられている問題ですが、問題解決のためには公権力の関与がむしろ「正義」として想定されるようになっていきますし、もしも公的機関が不関与を決め込むとすると、それは「無責任」な所業だとさえ考えられるようになっています。

家庭内暴力や児童虐待は公権力不介入原則の例外なのだとして処理する方法もあるかも知れません。けれど、これだけ大きな領域をまた無視できない数の事例を「例外」として処理しなければならないのは、理論としては美しくありませんし、フェアでもありません。あるケースには国家権力の関与を否定し、あるケースには国家権力の関与を要求するという、論理の御都合主義的な恣意的使い分けは、早晚行き詰まると思っています。目撃する現状は単純ではないという現状認識に素直に依拠すると、文字どおりの公私二元論を原則にするのは無理があるということです。

こうした問題意識を共有する人はそれほど少ないわけではないのだと思います。その反映だとも思うのですが、近年、理論枠の組み直しの作業が教育行政学のメインストリームにおいてもされ始めていますし、公権力不介入原則を強く掲げていた教育法学の領域においてもそうした動きが伺えます。以前だったら、さっきの切り抜けネゴシエーションではありませんが、これを言うとやばいよねというような雰囲気、「国家権力は価値領域に口出すな」原則はおかしいとは絶対いえない雰囲気があったと私は思っていますが、最近はそうでもなくて、理論の試行錯誤が許されているといえますか、活気づいているように思えます。そういう活気に刺激されたわけでもないのですが、私なりの長年の課題も先が少し見えそうで、そうした教育行政学領域の理論的ダイナミズムがおもしろいです。

メインストリームに咬むということで私が最近注目しているのは、憲法学の中山道子さんの仕事です。1980年代にマルクス主義フェミニズムが「不払い労働」という概念を使って、経済学のメインストリームに切り込んだように、近年の中山さんの仕事は憲法学の領域でメインストリームに咬むものです。彼女はどうかやら研究領域の仕事をやめてしまった

らしく悲しいのですが、公私二元論の限界という問題を、長年かけてまとめることをされました。

憲法学の中でもフェミニズムに言及することは珍しいわけではありません。男女平等の大切さをいうなどは、フェミニズムを背景にした問題提起であります。けれども語弊を恐れずに言えば、それはメインストリームに咬むという形態よりは、付加といいますか、メインストリームに足りないトピックや視点を付加する手法に近かったと思っています。そうした中で彼女は何をやったかという、ジョン・ロックまでさかのぼって、新しく発掘された資料も駆使してロックを他の論者との関係で検討し、公私二元論の論理を読み解こうとするのです、真正面から。私はご本人にお目にかかったことが無いので大柄な人か小柄な人か知らないのですが、その仕事ぶりは一人で果敢に、というイメージなのです。それで中山さんは何を導いたかという、社会科学全体がよりどころにしていた公私二元論は、あれはロックが提唱した当初から、公的領域と私的領域の無関係をいつているものでは全然ないということなのです。公私二元論というのは、公的領域は私的領域を切り離れた形にしておいた方が、公的領域が望んでいる私的領域が、さまざまな問題を避けて手に入ると思ったがゆえにロックが採用した、一種の政治的戦略的な方法であったということをお知らせするのです(『近代個人主義と憲法学 公私二元論の限界』東京大学出版会、2000)。従来の法学におけるフェミニズムのスタイルとはかなり違う研究スタイルですが、フェミニズムの問題提起と公私領域の問題に切り込んできた社会史の蓄積を十分にこなした素養がなければできなかった仕事で、フェミニズムの問題提起を持ってメインストリームに咬んだ見事な仕事だと私は思っています。

憲法学の人は、こうした根本的な問題提起を突きつけられてどうするのかなど思っていたら、ううん、どうも今のところ静観といいますか、無視といいますか、静かですね。すぐに対応できるようなスケールの問題提起でもないですから、「軽々しく」彼女の論を入れるわけにもいかないという事情もあるとは思いますが。

さて、クィア・スタディーズに話を戻しますと、クィアについてはある程度問題の存在は見えるようになってきていると思います。つまり先発的な「緊急性の喚起」の段階は過ぎて、理論化の段階に入っています。次に待っているのはモグラ叩きか、ゲッター化か、それともメインに咬むか、ということになります。課題はもちろん、どうしたらメインに咬むかということですが、いったいどういう論理を立てるとよいのだろう、どうすると咬んだことになるのだろう、と関心をもちながら今日のお話を聞きました。以上です。